幻想郷を出て十年くらい同棲している霊夢さんと早苗さん

諸注意

- 本書は東方 project の二次創作です。東方 project の著作権は上海アリス幻樂団様が、二次的著作物としての著作権は著者が保有します。別途許諾なき転載、複製、アップロードなどについては日本国著作権法に基づく損害賠償の対象となる場合があります。
- 本書は成年向け同人誌です。18 歳未満の閲覧についてはご遠慮ください。また、本書に描写された行為を模倣したことによって生じる責任は負いかねます。
- 「わった　とらいふる　でい」は pixiv リクエスト作品の、「幻想郷をでて十年くらい同棲している霊夢さんと早苗さん」は Charcoal Tail さまの合同誌「紅青フォーチュンズホイール！」寄稿作品からの加筆再録です。
- レズとか百合とかカプとかリバとかよくわからない人が書いています。はっきりしているのは霊夢さんは早苗さんが大好き、早苗さんは霊夢さんが大好きだということです。

目次

わった　とらいふる　でい　4
幻想郷を出て十年くらい同棲している霊夢さんと早苗さん　35
花と蛇と蛙　61
どらいびん　86
がーるず・あっと・わーく　99
もの食う二人　114
霊夢さんと早苗さんは同棲して十年ちょい　128
おまけ　152
あとがき・奥付　154

わった　とらいふる　でい

「……なんか、悪いことがしたいですねぇ……」

もぞもぞとベッドの上で霊夢の方に身を寄せながら、早苗はぽつりとつぶやいた。窓の外はとうに明るく、ブラインド越しにベッドの上に投げかけられる縞模様の陽光がぽかぽかとブランケットからはみ出た脚に暖かい。

「悪いことなら十分してるでしょ」

丸めた背中を早苗の方に向け、枕に顔を半分埋めたまま、霊夢がくぐもった声で答える。

「……あんたとこうしてここにいるだけで、あっちもこっちもしっちゃかめっちゃかなんだから」

「そういうマクロなことはどうでもいいんですよ」

ベッドシーツの上に広がった黒い髪。指先にかかったそれを梳くように弄んでいると、心地よいまどろみが再び訪れてくる。昨夜はパジャマも着ずに寝てしまったのだった。

「もっとささやかな悪事を働きたいなぁって」

「……あんた、もう暇を持て余したんでしょ」

飛び石三連休中日の日曜。連休なのは製造業のカレンダーで動いている早苗だけだが。昨日の夜は久しぶりに二人でお酒を飲みながらネットで映画を見て……ベッドに入ったのは何時だったろうか。

そして、今日の予定は何も立てていない。

「二度寝とか」

大儀そうに短く答えながら、霊夢が体を仰向けに転がして、早苗の方に腕を回す。

「いいですねぇ……」

「でしょ」

むき出しの肩に頬を預けて霊夢の体温に触れていると、瞼が自然と重くなるのを感じた。

「んふふー、おっぱい……」

重力に逆らってつんと天井を向いた胸。横合いからちゅっ、と唇で軽く触れ、寝乱れたブランケットの中で脚と脚を絡ませる。休日の始まりとしては悪くない、贅沢な時間の使い方ではある。満悦しきった猫のように目を細めてじゃれつく早苗を眠たげに眺めながら、霊夢はその首筋に指を巡らす。しなやかな指が襟足の後れ毛を梳くように撫でるのを感じながら、早苗は再び体が内側に向かって落下していくような眠りへと身を委ねた。

溶けたバター。キャラメル色に焦がした砂糖。バニラとラム酒の蠱惑的な芳香。キッチンから漂う甘い香りに、今度ははっきりと目が覚めた。

「ふぁぁぁ」

ベッドの上に体を起こし、寝ぼけたまなこをこする。キッチンから何かが油の上で跳ねるぱちぱちという音が聞こえる。時計を見上げると、平日なら朝食と昼食のちょうど中間くらいの時間を指していた。

「霊夢さぁん……？」

窓の外から差し込む初夏の陽光は暖かいが、布団を出るとさすがにショーツ一枚では肌寒い。部屋着にしているスウェットパーカを肩から引っかけ、ファスナーを上げると、はだしにスリッパをつっかけただけのあられもない姿でのそのそと寝室を出る。

「何を……」

ダイニングに顔を出した瞬間、何を作ってるんですか、と問おうとした顔が固まる。

「え、あ……何を……？」

「ああ、やっと起きたの」

早苗の方を一瞥すると、霊夢はコンロに掛けていた鉄のフライパンに視線を戻した。早苗の方からはよく見えないが、砂糖とバターが焦げる香ばしい匂いがする。
「……なんてえっちな格好してるんですか！」
「？　あんたも似たようなもんでしょ」
早苗同様の起きたときのショーツ一枚姿に前を開けたままのブラウスを羽織り、無地のデニムエプロンという恰好の霊夢は、平然と肩をすくめてみせるとコンロの火を落とした。
「私は一応パンツは隠れてますから！　しかもそれ私のじゃないですか！」
「道理で前が閉まらないわけだわ」
「いじめですか！　出るとこ出ますよ！」
「胸とか？」
「あーーーー！　もう！」
「何カリカリしてるのよ。お腹空いてんでしょ、あんた」
湯気の立つフライパンの中からガラスのサラダボウルに中身を移しながら、霊夢は肩をすくめた。ブラウスのサイズが合わないせいで、形良く張った尻を包む飾り気のない無地のショーツがあらわになっている。

「裸よりえっちじゃないですか……」
「？」
エプロンの傍らからショーツに包まれた張りのある尻が揺れている様は、いっそ裸にエプロンをつけているよりも生活感がある分生々しく蠱惑的だった。だいたい仕事で必要になる時を除いて、霊夢はいつも下着の類は量販店で地味な無地のものを買うようにしている。早苗が下着にかけている金額よりは桁が一つ下であるはずなのだが、中身が良いせいでいつだって早苗の目には同等以上に魅力的に見えるのだ。不公平極まりない。
「２００円のパンツでそんなえっちに見えるおしりがあっていいはずはないんですよ……」
「さっきから何ぶつぶつ言ってるのよ」
菜箸でサラダボウルの中身を整えると、霊夢はフライパンを流しにおいてエプロンを外し、早苗の方に向きなおった。
「そんな恰好でご飯食べるんですか？　お行儀悪いですよ」
「あら」
意味ありげに口角を持ち上げると、霊夢は目を細めて前の開いたブラウスの裾を持ち上げてみせた。優美なラインを描く柔らかな下腹部の中央で、形の良いおへそがあらわになる。

「悪いことしたかったんじゃないの？」
「うう……」
完全に霊夢のペースに乗せられたことを悟って早苗が低く唸っていると、霊夢はサラダボウルをダイニングテーブルに置いた。
「それに朝ごはんなんか作ってないわよ」
「……スイーツ……？」
「ありものででっち上げただけどね。つまらないものよ」
早苗は霊夢のおへそからガラスのボウルへと視線を移す。乳白色のクリームに重なった、色鮮やかなベリーの層。その上にはバターで焼いたバナナが惜しげもなくぎっしりと並び、緑色のミントの葉が彩を添えている。側面からは、層をなすカスタードとスポンジとベリーソースがフォッサマグナの構造線のようにのぞいていた。
「今作ったんですか？　これ？　クリームから？」
「卵と牛乳があればすぐできるわよ。まだ冷めきってないけど。ソースは冷凍のミックスベリーとこないだ煮たイチゴジャム。そろそろ使い切りたかったし」
淡々とした口調だったが、持ち上げた口角にほのかに挑発的な自慢の色がにじんでいた。

「悪いことしたいんでしょ？　だからごはんなんて作らないで、朝から甘いものでお腹いっぱいにするの」
「悪女（ワル）だ……本物の悪女がいる……」
芝居がかって大げさにからだをのけぞらせてみせながら、早苗は胃がきゅうと心地よく痛むのを感じた。
「十年も一つ屋根の下にいてこんな悪女とくらしていたとは夢にも思いませんでした」
「そう？」
悪戯っぽく片眉を持ち上げながらトライフルの表面を整えている霊夢を、早苗はじっと流し目で眺めている。
「あの」
「ん」
「ミニカップのストロベリー、まだありましたよね」
「……悪いやつ」
冷凍庫から取り出してまだ硬いままのアイスクリームをボウルの上に開けると、霊夢は呆れたようにボウルを手に肩をすくめた。
「行くわよ」
「食べないんですか？」

「ここではね」
霊夢はボウルを持ったまま寝室に戻り、低反発フォームのマットレスに尻を沈ませた。
「座ったら？」
促されるまま早苗がトライフルのボウルを挟んで隣に座ると、霊夢は指でボウルの中の甘いクリームをすくい取った。
「……汚れちゃいますよぅ……？」
「あとで洗濯すればいいわ」
しなやかな指に絡みつく、甘く煮た鮮やかなベリーとカスタード。口元に運ばれたそれを舌を突き出すようにして嘗めとると、早苗は上目遣いに霊夢の方を見た。
「……ベリーは落ちないんですから、脱いでください。一張羅なんですよ」
「やらしい」
くすくすと笑いながら、霊夢はブラウスの袖から腕を抜いた。羽のように軽い衣擦れの音を立てて、白いシルクのブラウスが床に落ちる。
「……今更見慣れたもんでしょ」

「まさか」
微笑みながら、早苗はスウェットパーカのファスナーを下ろすと肩からベッドのふちへと落とす。早苗の指が戯れるように、鎖骨から下の方へと優美な曲線を描く霊夢の胸へと触れると、霊夢はくぐもった吐息を漏らして、背中からベッドのほうに上体を横たえた。
「……押し倒された」
「押し倒しちゃいました」
早苗はくすくすと、冗談めかしてあだっぽい笑みを浮かべる。束ねた髪の毛先をシーツの上に広げながら、霊夢の視線が早苗の指先と口元との間を泳ぐ。
「……私のぶんは？」
「くいしんぼ」
「私が作ったんでしょ」
口をとがらせる霊夢の膝に膝を割り込ませるようにしてその体ににじり寄りながら、早苗は指をなめる。
「今、あげますね……」

ボウルの底からクリームとベリーソースの絡みついたスポンジ生地をひとすくい、半ばつかみ取るように持ち上げると、霊夢の口元へと運ぶ。

「んっ……」

ちゅうちゅうと、乳を呑む仔牛のように柔らかな舌が早苗の指を吸いたてる。赤いベリーのかけらが、指を伝って白い肌に深紅の花のようにしずくを作る。

「こぼれちゃった」

霊夢の上に覆いかぶさるようにして、柔肌の上にこぼれたベリーに舌を這わせると、早苗は霊夢に唇を寄せた。

「霊夢さんの分ですから」

互いに顔をかしげながら、舌と舌を絡み合わせる。口腔に絡む甘く猥りがわしいバニラの残り香を、甘酸っぱいベリーとさらりとした唾液とで咀嚼し、口の中で転がし、飲み下す。

「……どっちかにしなさいよ」

「やだ」

唇が離れると、もじもじとぎこちなく下着越しにすり合わせてくる腿の感触を意識しながら、霊夢は口をとがらせる。

「どっちも食べたい」
「食い意地が張ってるのはどっちよ」
仰向けに横たわったまま、とろりと甘く煮えたバナナをひとかけら早苗の口に運びながら、霊夢は呆れたように肩をすくめた。
「……下着越しだと、もどかしくて」
白い喉が揺れ、砂糖とスパイスをまとった甘い果実を飲み下す。言い訳するようにつぶやきながら、早苗は霊夢の下着に手をかけた。そのまま自分の下着も解くと、下腹と下腹をすり合わせるようにして腰をゆする。
「んんっ……」
表面だけを触れ合わせるような、ほほえましいほどに控えめな交合。それでも、女の体の一番柔らかい部分は互いにただ触れ合っているだけでもぴりぴりと歯が浮くような心地よさを伝えてくる。
「霊夢さんの……おまんこっ、とろとろで……えっち……」
「あんたのほうがっ……濡れてんじゃない、のっ……」
ぎゅう、と内股を押し付けてくる早苗の腰を脚で抱え込みながら、霊夢の頬もほのかに熱を帯びて朱に染まっていく。

「んふっ、おかわりっ、もっと」
「ほら、口っ……開けなさい、よ……」
くちくちと濡れた音とともに、甘い果実の香りでも覆いきれない、発情した猫を思わせる刺激的な雌の匂いが立ち上る。口腔に押し込まれるとろりとしたなめらかなクリームの塊をほおばり、嚥下しながら、早苗は無心に指を啜りたてる。
「んんっ、はむっ、おいひぃっ」
「でしょっ」
おずおずとした腰の動きが、徐々に徐々にとぶつけるような激しさを増していく。腰をゆすりながら霊夢の指をしゃぶりたてる早苗の唇はぽってりと朱を帯び、濡れた凄艶さを放っていた。
「あうっ……」
「んんっ、こらっ」
口腔粘膜を弄ぶようにまさぐっていた指が抜け、早苗の唾液とベリーの混ざった鮮やかな露が口の端からほのかに汗ばんだ霊夢の胸へと滴り落ちる。矢も楯もたまらずといった風に首をめぐらして胸にむしゃぶりつく頭を、霊夢も咎めはするが押しとどめようとはしない。

「だってっ、じゅるっ、もったい、なはひゃいっ」
「がっつかないで、よっ……！」
「だって、おいひい、もんっ」
軟体動物のように舌をうねらせ、ぷっくりと膨れ上がった胸の先端に貪りつきながら、早苗はごりごりとベッドに霊夢の体を押し付けるように腰を使う。忘我の境地で柔肉に食らいつくその姿は、乳を飲む仔というよりは獲物を骨までしゃぶる肉食動物のそれを思わせた。
「……近いんでしょっ……」
ふるふると下腹から伝わる小刻みな震えを感じて、霊夢が早苗の肩に腕を回す。その腕の中に身をゆだねるようにしながら、早苗は再び霊夢の顔に顔を寄せる。
「ほら、我慢しなくていいっ、から」
眉をゆがめてそうささやく霊夢の目元にも涙が滲んでいた。唇と唇が重なり、舌で、腕で、互いの体を絡ませ、求めあいながら、最後の女陰の芯で熱くはれ上がった肉芽をぐりぐりと押し付ける。
「――ッ……！」

台地（プラトー）のようになだらかに、ゆっくりと続く法悦に先に上り詰めたのはどちらだったか。声にならない悲鳴を漏らして互いの身を抱きすくめながら、二つの体がまるで一つの生き物のように震える。

「……ごめん、なさい」

ぺたん、と首の座らない赤子のように脱力した首を霊夢の胸に持たれながら、早苗が消え入りそうな声でささやく。女蜜とは明らかに異なる、生暖かい液体がちょろちょろと触れあったままの腿を伝って、シーツの下へと沁みとおっていく。

「かかっちゃって……ますよね」

「いいわよ」

失禁していることは分かっていても、体に力が入らない。押しとどめようがない。ばつの悪さを隠し切れずに、泣きそうな顔をしている早苗を、霊夢は腕を伸ばして胸の中に抱き寄せる。

「後でまとめて洗濯しましょ」

力の入らない頬をぺたんと預けてくる早苗を、首筋を手のひらで撫でるようにして抱きながら、霊夢は枕元に転がったボウルにもう片方の手を伸ばす。ガラスボウルの中のトライフルは二人の指でかき回され、赤いベリーと乳白色のクリームとがかき乱され、整っていた層も混然としどけない姿をさらしていた。

「あとひとくちぶんあるわね」
「……はんぶんこ」
「欲しがり」
二つの手が甘く滑らかなクリームを絡ませて互いの唇を撫で、二人はそのまましばらく荒く肩で息をしながらベッドの上に転がっていた。

「はぁぅぅ……」
普段より少し熱めの湯に腰までつかりながら、早苗は伸びをした。ユニットバスに毛が生えたような大きさの、膝を伸ばすには少し手狭な湯船だが、肌にじんじんと染み渡る熱い湯の中でだらりと浮力に身をゆだねていると、肺の中にたまった空気が呻吟とともに勝手にあふれだしていく。
「朝寝、朝湯……これは身代つぶしますねえ……」
首を左右にぐるぐると回しながら、行為の後の心地よいけだるさに身を浸す。ルーバー窓から差し込む初夏の日差しが目にまぶしい。こんな時間から湯船に浸かっていると、確かに何か悪いことをしているような気がしてくる。風

邪で休んだ日、普段なら教室で机に向かっている時間に布団にくるまって普段見ないテレビを眺めているような、場違いゆえのほのかな罪悪感を孕んだ特別さ。湯の中から引きあげた指を鼻先に運んで、すんと息を吸う。

「……？」

まだ染みついて落ちない、甘いバニラの香りに混ざって、どこからか油の中で跳ねるにんにくの香ばしい香りが漂ってくる。

「……今日はごはん作らないんじゃなかったんですか？」

「夕方から私仕事だもの。あんた晩どうすんのよ」

キッチンで何かを炒めていた霊夢は、タオルで髪先の水気を拭いながら風呂から上がってきた早苗を一瞥すると、香ばしい匂いを漂わせるフライパンに視線を戻した。

「……今度は何作ってるんですか？」

「中東風トマト煮込み（シャクーシュカ）」

紙パックのダイストマトをフライパンの中に放り込み、木べらで軽くかき混ぜると、霊夢はグラスの中で泡を立てる琥珀色の液体を一口すすった。

「口の中が甘くなると、何かしょっぱいものが欲しくなるじゃない？」

「日の高いうちからお酒なんかのんでー」
「朝寝朝湯ときたら朝酒でしょ」
ショーツ一枚の尻をキッチンの床に据えて口をとがらせる早苗に、霊夢は早苗の分のグラスを押し付けるように差し出す。
「あんたも飲みなさいよ」
「日の高いうちから私酔わせてどうする気なんですかぁ」
「……飲ませとけば静かにしててくれるかと思って」
にへら、と緩んだ笑みを浮かべて、早苗は受け取ったグラスの中身を口にした。オレンジジュースで割ったスパークリングワインが、渇いた喉に冷たく、満ち足りた胃に熱く、じんわりと沁みとおる。
「霊夢さんって、色々作りますよねえ」
「何よ、にやにやして」
目を細めてふやけた笑みを浮かべる視線を意識的に無視しながら、霊夢はフライパンの中身を木べらでかき混ぜていた。

「……こっちは食材もいろいろあるし、お肉もお魚もいつだって手に入るし。お米だって搗かなくても玄米のままでも美味しいし。便利ではあるわね」
「だから私は太るんですよ」
「そう？」
むにむにと、ショーツのゴムの上で柔らかくも幸福な曲線を描く早苗の腹を一瞥すると、霊夢は愉快そうに笑う。
「そうやって太らせてから食べる気なんでしょ」
「あんたに合いそうな赤（キャンディ）は一本取っておいてあるわ」
「そら豆もそろそろ出盛りですしねえ」
グラスに唇を触れさせたまま、とろんとした微笑を浮かべていた目が、すっとどこか遠くをあてどなく見やった。
「……むこうのごはんが懐かしいことってないですか？」
「そうね」
ふつふつと煮えるトマトと野菜の中にへらでくぼみを作ると、卵を割り入れ、蓋をする。火を弱火に落として、あとは余熱で卵に程よく火が通るのを待つ。
「外のひとは、そうやって懐かしいとか素朴だとか言うけどさ」

「はい？」
「……どこに暮らしている人だって、その時々で手に入るもので、工夫を凝らして、精一杯おいしいものを食べようとしてるわけよ。それに変わりはないわ」
「そうやっていつだってなんだかんだ言いつつおいしいもの作ってくれるんですからぁ」
「ひとりぶんよりふたりぶんのほうが作るの楽だもの」
「またまたぁ」
「ペース早いわよ。……飲ませすぎたかしら」
「だって今日、わたしお休みですしぃ」
グラスの中身を呷るように傾ける早苗を見下ろしながら、霊夢は呆れたように肩をすくめる。
「だいたいあんただって一通りはできるでしょ」
「んー……」
早苗は氷だけになったグラスをくるくると弄んでいた。
「何が食べたいー、とか、何を作ろうー、とか、ないんですよねえ。もうずっと」
とろんとした目で、溶けかけた氷を見つめていた。

「家に帰ると美味しいごはんがあって、お弁当も持たせてくれて、外に出ればどこかおいしいお店に連れてってもらえて……気が付くと自分で何を食べよう、とか考えることも忘れちゃいました」

「……あんた、私がいなくなったらどうすんのよ」

「飢え死にしちゃいますねー」

こともなげにそういってのけると、早苗はグラスを置いて野菜かごのなかのきゅうりをつまみ上げ、綺麗な石を拾った子供のように眺めていた。

「……なんかないの、そういうの。よく言うじゃない。明日世界が終わるなら、みたいなやつ」

「それは決めてますよ」

「何よ」

「煮たシイタケとお茄子の漬物が乗ったお寿司、それにおつゆは大根とジャガイモで、あとはレンコンのきんぴらがあれば言うことないですねえ」

「よく覚えてるわね、そんなの」

「……忘れませんよ」

そうやって何のかんのとたわいもない言葉を交わしながら、台所に立つ横顔は十年前と変わらなくて。きっと十年後も変わらないだろう。
「ぬか床、また作ろうかしらね」
「いいですよねえ、霊夢さんのお漬物。お母さんの味ってやつですよ」
「そういう趣味はないわよ？　私」
「でもおっぱい吸わせてくれるでしょーぅ」
据わった目にほんのりと挑発するような淫蕩の色がにじんでいた。
「……きゅうりとか、お茄子とか、えっちですよねえ」
「頭が沸いてるの？」
「いつもの霊夢さんなら、食べ物で遊ぶと怒るじゃないですかぁ」
いぼもまだ瑞々しい、青々としたキュウリをもてあそぶように白い腿にすり寄せながら、早苗の赤い舌がちろりと唇の端を舐める。
「今日の私は悪い子なのでー」
「……はぁ」

この日一番の大きなため息をつくと、霊夢はコンロの火を止めた。
「ちょっと来なさい」
「えー？」
どこか嬉しそうな顔をしている早苗をリビングまで引きずるように連れていくと、ソファの上に押し倒す。
「やぁん」
「遊ぶな」なんて言わないわよ」
早苗が髪に巻いていたタオルで目を塞ぐと、自分の肩にかけていたもう一枚のタオルで脚を抱えさせるような格好に縛り上げる。
「うぅ……恥ずかしいですよう、こんな格好」
「やるなら真面目にやんなさいよ」
手際よく早苗の肢体をソファの上で拘束すると、霊夢は甘えた声を漏らすその正面に立った。
「……全部当てたら許してあげる」
ぴっ、と何かプラスチックの包装をはがす音。霊夢の足音。何か重量感のあるものがソファのクッションに置かれる音。ふわふわとした荒い木綿が視界をふさぐ中、鋭敏にさせられた聴覚の中で早苗は期待に肩を震わせる。

「ひっ……？」
霊夢は無言のまま、替えたばかりのショーツを早苗の膝まで引き下ろす。しどけなく秘裂を視線にさらす、心細くも解放的な感覚に身を浸す間もなく、何かひやりとして固いものが柔らかな肉に押し当てられる。
「……きゅうり？」
「正解」
心なしかつまらなそうに言うと、霊夢は早苗の秘蜜がにじんだきゅうりをその口元に押し付けた。
「んっ……ゴム、してくれたんですねっ……」
「……後で使うからね」
「霊夢さんが、ですかぁ……？」
「料理によ」
いとおしげに舌を這わせてくる早苗からきゅうりを引き離すと、次の食材がとろとろとした透明な蜜を溢れさせる秘唇に押し当てられる。
「んんっ……あぅっ」
「もう少し奥まで入れてあげたらわかる？」

きゅうりよりは先端が細いが、硬く、ごつごつとしている。コンドームをかぶせられた野菜をじりじりと早苗の中にねじ込ませる霊夢の方も、興が乗ってきたのか口の端に熱を帯び始めていた。

「にんじんっ……にんじん、ですね……？」

「正解。次」

「んぁっ……」

柔肉を押し広げる、根菜の硬い感触と、霊夢に食べ物で犯されているという被虐的な満足感に、早苗は身をよじらせる。

「おっ、お芋……」

「なんのイモよ」

膣を押し広げられる圧迫感は、指やディルドでもてあそばれるよりは少ない。しかし本来口にするための食品で雌の弱い部分を弄ばれる、背徳的な状況が早苗の興奮をぞわぞわと背筋から逆なでする。

「……やまいも？」

「不正解」

下腹がじんじんと熱くなる、酩酊にも似た火照りに脳の芯が酔わされていくのを感じながら、ぐるぐると台所にあった買い置きの野菜の姿が去来する。

「……さつまいもっ、さつまいも……ですっ……」

「正解」

愉快気に目を細めながら、霊夢は次の野菜を手に取る。

「これは？」

「あんっ……」

丸っこくて表面はなめらかだが、明らかに今まで挿入されたものよりは太い。視界を奪われると、想像の中でその暴力的な量感が勝手にふくらみ、早苗は期待と不安に息を喘がせる。

「そんなのっ……ふといっ」

「小ぶりだから大丈夫でしょ。さっさと答えないともっと奥まで入ってくわよ」

「んんっ、茄子……！　お茄子ッ！」

「ふーん、正解」

絶叫するように肩を震わせる早苗をよそに、霊夢はつまらなそうに肩をすくめ……やがて、何かを思いついたように口元を歪めた。
「じゃあ、最後。これ」
「はぁうっ」
早苗の背中に覆いかぶさるようにして、霊夢が耳元でささやく。野菜とは明らかに違う、暖かな血の通った何か。しなやかで、長く、細く、それでいて早苗の膣内でうねる襞の隅々までを知り尽くしたかのように、的確にこそばゆい部分に触れてくる。
「そんなの、わかんないっ」
「そーう？」
くちゅくちゅと粘ついた音を股座から響かせながら、早苗は目を隠されたまま口元だけで意味ありげな笑みを浮かべる。
「もっと奥まで入れてもらわないと……わかんないですよぅ……」
「欲しがり」
「んぁっ……」

よだれのようにぽたぽたと甘露を垂らす秘唇を責め立てられながら、今度はその少し上できゅうきゅうとうごめく肉穴に固い何かが押し込まれる。
「だめ、ですよぅ……そんなっ、とこ」
「ちゃんと綺麗にしてきたんでしょ」
何度となく交わるうちに力の抜き加減を覚えた肛穴は、言葉とは裏腹にじりじりとねじ込まれる野菜をあっけなく受け入れ、呑み込んでしまう。前後から優しく責め立てられながら、霊夢の吐息が産毛を逆なでするように耳朶をくすぐる。
「……責任もってあんたが全部食べるのよ」
「ああっ、そんなぁっ……」
「お弁当に入れてあげようかしら？」
コンドーム越しとはいえ、食材で排泄口をもてあそばれ、あまつさえ食べさせられる。それも早苗と霊夢の関係を知らない誰かの前で。想像しただけでも、ぴりぴりと耳の裏が熱くなる。
「やだっ、そんなの……おしごと、いけなくなるっ……」
「じゃあちゃんと答えなさいよ」

口ではそういいながらも、腰が勝手に、霊夢の方にすり寄せられていく。愛する女に屈服する快楽に身を浸しながら、早苗は重く口を開く。

「指……」

間違えようもない。

「右手の、中指っ、奥まで、ぜんぶっ」

唇で、尻穴で、胸で、膣穴で、あるいは早苗じしんの指と絡め合いながら、なんどこの指で絶頂を味わっただろうか。体も心も胃袋も満たしてくれる、優しく、柔らかな手。

「いい子ね」

「はうっ」

指ときゅうりとで早苗の体を内側から責め立てながら、じっとりと汗ばんだ首筋に唇が触れる。それ以上言葉は必要なかった。きゅうきゅうと会陰のあたりで筋肉がひくつくのを感じながら、やがて訪れる絶頂に備えて肩の力を抜く。一段また一段と手を取って階段を上るように快楽の高みへと導きながら、霊夢は体と体をぴたりと添わせる。

「――ッ……！」

包み込まれるように抱かれながら、早苗はヒトの可聴域を超えた声にならない悲鳴を漏らす。からだとからだが溶けて一つになってしまったような錯覚に、脳が揺れる。

「……ダメ、今、触っちゃ……」

「やだ」

目隠しが取れる。タオルが吸いきれなかった涙をにじませながら、早苗は肩を震わせて眼前の霊夢を見つめていた。

「こういう時のあんた、可愛いから」

珠のようなあ汗がにじんだこめかみを、霊夢は指を伸ばして拭う。触れた指先からぴりぴりと電流が流されたような痺れが肌の下へと沁みとおり、苦痛とも快楽ともつかない痙攣がふるふると柔らかな腹を震わせる。

「……悪い子」

呆けたような笑みに表情筋を弛緩させながら、早苗が戒めから自由になった腕を伸ばす。霊夢は誘われるようにその胸の中に頬を預けると、しばらくそのまま二人して背中を丸めたままさざ波のような余韻に浸っていた。

「あー、余計な時間食っちゃったわ」

空になったワインの瓶でまな板の上のキュウリを叩く霊夢を、早苗はソファの上に膝を抱えるような格好で座ったまま眺めていた。

「……何見てんのよ」

「いやぁ」

にまにまと嬉しそうに笑いながら、霊夢が淹れた茶を一口すする。熱くて良い香りがしてほんのりと甘く、風呂と行為の後で渇いた胃にすっと染み渡って、初夏の風のようなさわやかな後味だけが口の中に残る。

「手際いいな、って」

「言っとくけど」

叩いて刻んだきゅうりに塩を振りながら、霊夢が言った。

「今日だけよ。次に私が台所に立ってる時に邪魔したら、本当にあんたの肝臓をニラと一緒にオイスターソース炒めにしてやるわ」

「はぁい」

気にした風でもなく、のんきに茶をすする早苗を一瞥すると、霊夢ははぁ、とため息をついた。

「……明日は私も休みだからさ」

「はい」
「どっか、行きましょうか」
「いいですねえ。温泉とか」
「……いいわね」
塩を振って余計な水気を出したキュウリにチューブのニンニクとゴマ油。鶏がらスープの素を小さじに半分。夕食の頃には味がなじんでいるだろう。
「早苗？」
晩まで冷やしておくものを冷蔵庫にしまうと、やけに静かにしている早苗の方を振り仰ぐ。膝の上に湯飲みを置いたまま、早苗はうつらうつらと舟を漕いでいた。
「……しょうがないわね、まったく」
「むー……」
湯呑を取り上げ、気持ちよく眠りの中に落ち込んだ肢体をそっとソファに横たえる。ショーツ一枚のあられもない湯上り姿のままの素肌にブランケットを掛けると、霊夢は屈みこんで早苗の柔らかな前髪のあたりに唇で触れた。
「風邪ひくわよ」

幻想郷を出て十年くらい同棲している霊夢さんと早苗さん

「とーふやさん？」
ガントチャートを映していたモニタから目を上げると、専務がいた。専務といっても中小企業の小の方、経理を担当している社長の奥さんだが。
「ごめんね、やっぱり納期伸ばせないみたいで……加工のほうもね、どうも」
「わかりました」
手元の工程表と専務の顔を交互ににらめっこしながら、早苗は頭の中で納期と作業の進捗を暗算する。
「今日、残業つけますね」
「ごめんなさいね、お願い」
精一杯の申し訳なさそうな笑顔を作って、専務は背中から計測室のドアを押し開けて出ていった。一人残された早苗は、椅子に座ったまま小さく伸びを一つして、机の上のスマートフォンに手を伸ばした。
『すみません、残業です。二時間くらいだと思います』
一呼吸おいて返信がつく。
『私も出かけちゃうから、先に食べてて』

今日のごはんはなんですか……途中まで打ちかけて、送信する前に消す。楽しみは先に取っておいても罰は当たらないだろう。口角がひとりでに持ち上がりかけるのを抑えて、気持ちを仕事のほうに切り替える。加工部からモノが上がってくるのをぼーっと待っているわけにもいかない。

『ああ、それと』

……せっかく気持ちを切り替えかけた瞬間、再び通知欄が点滅する。

『荷物来てたから受け取っといたわよ。詐欺じゃないと思うけど』

「お疲れ様でーす」

夏至は過ぎたとはいえ、まだまだ日は長い。定時を二時間過ぎて職場を出た時も、まだ空はほんのりと藍色にたそがれていた。日中の暑さもやわらぎ、スクーターを駆る袖に夜風が心地よい。気分もどこか、そわそわとして落ち着かなかった。

「ただいまー」

会社から原付二種で三〇分の家路。アパートの階段を上る足取りも心なしか軽い。１ＬＤＫの狭いながらも楽しい我が家。誰もいないのはわかっていたが、それでもただいま、と声をかけるのを、早苗は意識して習慣にしていた。目当てのものはダイニングテーブルの上、ランチョンマットの上にそろえて伏せられた椀と箸の傍らにおいてあった。特別送達の印が押された分厚い封筒。はやる気持ちときゅうとなるお腹を抑えて、先にシャワーを浴びる。髪にこびりつい

た汗と切削液と機械油の匂いを熱い湯で洗い流すと、早苗は部屋着に着替えてダイニングに立った。

一膳ごとに小分けした玄米を冷凍庫から出してレンジで温めながら、特別送達と記された封筒の中身を改める。一人勝手に笑みが浮かんでくるのを抑えて、早苗は封筒を神棚の下に置いた。霊夢が帰ってきたら話をしよう。

鶏肉のトマト煮、アボカドときゅうりのヨーグルトサラダ。ほうれん草のスープ。ダイニングテーブルの上に並べると、冷蔵庫から缶入りのカシスオレンジを出す。普段は食事時に酒は飲まないが、今日は特別だ。アルコール三％のカシオレを半分コップに注ぎ、残りは冷蔵庫にしまっておく。これでも早苗には多いぐらいだ。

「……ぷえ」

すきっ腹に炭酸とアルコールが染みわたるのを感じながら、いただきます、と小さく手を合わせる。トマトソースで煮込んだ鶏もも肉はしっとりとしているのに柔らかい。ベランダで育てているローズマリーの緑が目にも鮮やかだった。向こうにいたときから何のかんのと台所で色々なものを拵えていたが、相も変わらず霊夢は料理が上手い。ちびちびとカシオレをすすりながら、テーブルの向かい、誰もいない椅子に目を落とす。今日はまたスナックの仕事だろうか。それとも……。

「……ごちそうさまでした」

手を合わせると、ほろ酔いで足腰がおぼつかなくなる前に食器を食洗機に片付ける。まだ夜は早いが、アルコールが眠気を誘う。明日は金曜で、霊夢も土日は予定がないはずだ。明日ゆっくり話をしよう……重たい足を洗面所まで引きずって歯だけは磨くと、早苗はベッドにはいって明かりを落とした。

遮光カーテンの隙間から差し込む、淡い曙光。寝室の襖越しに聞こえる、小気味よい包丁の音。鰹出汁の微かに燻たい、香ばしい香り。グリルの中でぱちぱちと音を立てて焼ける魚、しゅうしゅうと音を立てる炊飯器から漂う、ご飯の炊ける匂い…まだ寝ていてもいい時間なのは時計を見なくても分かったが、胃の底のあたりがくるくるともの問いたげに鳴っていた。

食欲と睡眠欲の間で板挟みになったまま、ベッドの中で輾転反側していると、急に台所が静かになった。

「……おかえりなさい」

「ん、ただいま」

静かに寝室の襖が開く。早苗がシーツの上でわずかに身をよじらせると、空いた空間にするりと霊夢が潜り込んだ。まだかすかに湿った髪から、ほのかに石鹸の香りがした。

「これから寝るんですか?」

「……あんたもまだ、寝てていいわよ……朝ごはんとおべんと、できてるから」

眠たげな声でそうささやくと、霊夢は早苗の背中にそっと頬を預けた。

はぁ、と静かに早苗はため息をつく。こういうわけでこの十年、早苗の料理の腕はまったく進歩していない。

「……早苗」

「なんですか」

「ああいう甘いの、好きじゃないんだけど」
吐息からかすかにカシスの匂いがした。

昼。早苗が食堂で弁当の包みを解いていると、専務がどこからともなく姿を表した。
「ここいい？」
言うが早いか、専務は早苗の斜め向かいに座ると、会社の給食を手に席を探していた別の一人を手招きした。
「……あっ……ども……」
手招きされた社員の一人が、おっかなびっくり専務の隣、早苗の向かいに座る。加工部の新人、と言っても春に第二新卒で転職してきたばかりで、職人肌の多い工場の中では追い回しのようなことをやらされている。歳は確かまだ二十代前半で、早苗よりはすこし若かったはずだ。
「それにしてもとーふやさん、いつも丁寧にお弁当作るわねえ」
「いえ、あの……」
今日の弁当は焼き鯖の棒寿司。朝焼いた塩サバを使ったものだが、煎りゴマと大葉の香りが香ばしい。骨も丁寧に抜いてある。添えられたヌカ漬けのキュウリは霊夢の手製だ。早苗が何度自分で作っているわけではないと言っても、専務は謙遜だと思っているのか、弁当は早苗の自製だと思い込んでいる。母親でも姉妹でもない女性と一緒に住んでいて、その人に作ってもらっている、という事情を早苗の方で噛み砕いて説明できないせいもあるが。

「ねえ、杉本くん。やっぱり料理の上手な女の人はいいわよねえ……最近じゃ古臭いって言われるだろうけど」
「ええ、あはは……」
あいまいな笑みを返しながら、早苗は内心で肩をすくめる。専務も社長もいい人だし、居心地の悪くない職場ではあるが、若い男性社員が入ってくるたびに専務が妙な世話を焼きたがるのには些か閉口していた。そもそも古株はともかく、新しく入ってきた社員はなかなか居つかないので専務の気回しもたいてい空振りに終わるのだが。
「あ、そうだった。社長と話があるんだった。ごめんなさいね」
わざとらしく専務が席を立つと、あとには早苗と若い社員だけが気まずい沈黙の中に残された。
「……あの」
先に沈黙を破ったのは、杉本のほうだった。
「昨日はすみませんでした」
「え？」
「いえ、あの……自分の加工ミスで……東風谷さんにも……」
なんだ、そんなことか。話が仕事のことになると、早苗の感じていた気まずさもいくぶん和らいだ。
「……大丈夫ですよ、それも仕事のうちですから」
「すみません」
申し訳なさそうな顔をしている青年の顔を眺めていると、自分にそういう時代があったことを思い出す。こっちに

戻ってきて、なんとか学校を出て最初の就職はまともに休みも取れなければ新人教育もないようなところで、ずいぶんと思いつめたこともあった。そんな時に支えに、というか尻をひっぱたいてくれたのは……。

「そういえば」

「え？」

気づけば相好が緩んでいた。あらぬ方に飛んでいた思考を、目の前に座る青年の方に引き戻す。

「なんで専務は東風谷さんのことをとーふやさんっていうんですか？」

「ああ……それですか」

簡単な話だ。

「最初に面接受けたときに、社長が間違えて私の名前を『とうふうや』って読んじゃって、それからですね」

それ以来、古株の社員たちはみな早苗のことを「とーふやさん」と呼んでいる。仲間内の冗談みたいなものだ。

「『東風（こち）吹かば』の東風ですよね」

「ですです。なかなか伝わらなくて……」

くすくす、と穏やかに早苗は笑う。異性と他愛もない会話を交わすのはいつ以来だったか。自分でも意外だったが、喋ることが苦痛ではなかった。

「あの、すみません」

「はい？」

控えめに笑っていた青年が、急に緊張した面持ちを浮かべる。
「……突然なんですけど、きょう、仕事の後って……」
じく、と鈍く胃の奥がうずくのを感じた。男女の機微にはとんと縁がないが、それでもこの青年が早苗のことを憎からず思っている――のは理解できた。
「……ごめんなさい。今日は先約があって」
そう言ってから後悔した。予定がなければ、彼の誘いに乗っていただろうか。悪い人ではない。真面目だが不器用な年下の男。無意識のうちに可能性を残そうとしていたのだろうか。
「ごめんなさい」

定時ちょうどで仕事を上がる。家に着いたときにはまだ明るかったが、早苗の気分は晴れなかった。昼に交わした会話が澱のように重く胸の中に沈んでいた。罪悪感をなだめるために途中で買ったアイスが、レジ袋の中で所在なげに揺れている。
「あら、早苗」
「……霊夢さん？」
スクーターを駐輪場に入れると、ちょうど霊夢がアパートの外階段から降りてくるところだった。
「――出かけるんですか」

「……ちょっとね」
傍目にも、急いでいるように見えた。
「あの」
「何よ」
早苗の傍らを通り過ぎようとする霊夢を呼び止める。呼び止めて、何の話をするというのか。
「あの、大事な話が……あって」
「帰ったら聞くわ」
「何時に帰るんですか？」
「わからない」
「そう、ですか……」
「じゃ、行くから」
短く言い残すと、霊夢はそのまま街明かりの方へと消えていった。

溶けかけたアイスを冷凍庫にしまうと、早苗は暗くなり始めた部屋の中でため息をついた。築年数は古いが、台所が広いのとガスコンロが三口あるのが気に入って、今の仕事が決まってから霊夢と決めた部屋だ。ひとりでたたずんでいると、どうしようもなく広く、自分の家にいるのに心細く思えた。

冷蔵庫には途中まで下ごしらえした食材が入っていた。流しの水切りカゴには、まだ濡れたまな板と包丁がかかっている。食事の支度を途中までして、急いで出かけたのだろう。どこへ行くのかは結局聞けなかった。神棚に燈明を灯して、柏手を打つ。幻想郷にいた頃のように姿を見ることはできないが、それでも今は二柱にすがりたかった。

通帳と印鑑がしまってあるタンスの引き出しのさらに奥、小さな桐箱を開ける。かすかに埃の匂いが鼻をつく。赤いリボンと蛙の髪留め、そしてセピア色ににじんだ新聞の切り抜き。写真の中で照れくさそうに笑っている十年前の二人。二人が自由に空を飛んでいた時代のよすがといえば、もうこれだけだ。

幻想入りしたこと――再びこちらに戻ってきたこと。最初は一人と二柱、次に二人で。後悔した日がないといえば嘘になる。けれども、自分で決めたことだ。

写真をタンスにしまい、洗面台の前に立つ。鏡の中の自分は十年分の時を重ねている。それは人間であることの限界だ。年老い、やがて死ぬ。あるいはいつか、神霊として祖霊の列に加わるのかもしれない。その時の自分がまだ東風谷早苗でいるだろうか？

普通の人間であれば。ただの女であれば、学校を出て、就職し、時には恋をして、家庭をもったのかもしれない。いや、今日だってその方向に踏み出すことはできた。けれど、ずっと昔に決めたのだ。博麗霊夢のいない世界を生きる気はない、と。

赤い月が出ていた。廃業したショッピングセンターの屋上、人影もなくさびれたコンクリートと錆びの浮いたの売店

の間を、生ぬるい風が吹き抜けていく。
「……まさかあんたをよこすとはね」
「寄越す？」
霊夢が見上げる空の先、赤い月を背中に、箒に乗った少女が浮いていた。
「私は自分の意志で来たんだぜ」
「今更何の用よ」
「決まってるだろ」
目を細めて見上げる鋭い視線に臆することなく、少女は黒い帽子の影から不敵な笑みを覗かせた。
「どんな腑抜けたツラをしてるか、拝んでやろうかと思ってな」
魔理沙の姿は十年前と変わらなかった。顔つきも、体形も、あどけなさを残した十代の少女のままだ。それはつまり、もう彼女が人間ではないことを意味していた。
「……だが、思ったほどカンは鈍ってないようだな、安心したぜ」
帽子を手で押さえながら、魔理沙はあたりをぐるりと見回す。人の気配がまったくない。この廃ショッピングセンターだけではなく、街のこの一角からひとの姿が消えている。
「人払いの結界か。用意周到だな」
「……そんなにあからさまな妖気を振りまかれたらね。サルだってわかるわよ」

「そんなに霊力に余裕があるのか？　もうまともに空だって飛べないんだろ？」
「ご心配痛み入るわ」
空に浮く少女から間断なく吹き付ける抜き身の殺気が、霊夢の髪を揺らす。今日のために整えた針と札を指の間に手挟みながら、霊夢は一人勝手に口元が歪むのを感じた。
「昔のよしみよ、楽に退治してあげる」
「……抜かしてろ」
魔理沙が空中で腕を振り払うと、どこからともなく現れた魔法導弾（マジックミサイル）が紫色の炎を宵闇に揺らめかせた。
「薙ぎ払え」
扇状の軌道を描いたミサイル群が、コンクリートの上に破孔をえぐる。霊夢はとっさにミサイルの合間を縫うように跳ねて躱す。常人に比べれば身軽ではあるが、それでも飛ぶというよりは浮くのがせいぜいであった。すでに巫力の盛りを過ぎて長い。
「当たると死ぬぜ？　がんばって避けるんだな」
「くっ」
『ごっこ』用の弾幕ではない。物理的な破壊力を持った弾だ。弾道軌道を描いて飛来するマジックミサイルの斉射をかわしながら、霊夢は札を放つ。
「無駄だぜ」

曳光弾のように赤い残像を曳いた札は吸い寄せられるように魔理沙の方へと飛んでいくが、魔理沙はよけようともせず飛来する札に八卦炉を向ける。

「消し飛びな」

目を焼くような光芒が、ビルの屋上を右から左へと舐める。給水塔の鉄骨がマスタースパークの直撃を受けて、ぐにゃりと飴細工めいて曲がる。

「どこを見てる？」

間一髪、錆びた給水タンクが転がってくるのを避けた霊夢に、魔理沙はミサイルの三斉射目を放つ。迫撃砲弾のように山なりの軌道を描いたミサイルが雨のように屋上に降り注ぎ、爆風が霊夢の体を木の葉のように揺さぶった。

「あがっ……」

ようやくのことで体をコンクリートの上に転がし、衝撃を受け流しながら、霊夢は荒く息をつく。霊力などとうに残っていない。命名決闘（スペルカード）の縛りもない。昔ながらの、人間と妖怪が死力を尽くす食うか食われるかの死闘。塗装が粉を吹いたエアコンの冷却塔に寄りかかって体を起こしながら、それでも霊夢は正面から魔理沙の目を見ていた。

「……それで終わり？」

「死にたいのか？」

眉の上が切れて、血が目に入っていた。

「自由に空を飛んで、派手に魔法をぶっ放して、あんたはそれで満足？」

「哀れだぜ、霊夢」
魔理沙は崩れたコンクリートの上に降り立つと、肩をすくめた。
「胸と尻ばかりぶくぶく肥えやがって。醜いぜ、今のお前は。誰よりも自由だったお前が、こうして外の世界でただの人間として腐っていくなんてな」
「順序が逆よ」
一歩、また一歩。淡く光る八卦炉を握ったまま近づいてくる魔理沙を、霊夢はじっと片目で見据えていた。
「私には結界（システム）を守る責任があった。だから私は自由でなければならなかった。あんたはどう？」
「ああ？」
「人間を止めたところで、今のあんたは十年前よりもずっと不自由に見える」
笑える。笑っていた。残機のない真剣勝負。スペルカードを放つどころかまともに空を飛ぶ霊力も残っていない。それでも博麗霊夢は笑っていた。
「あんたの背中、まるですすり泣いてるように見えるわ」
「……やはり死にたいらしいな」
魔力を込めて淡く光る八卦炉を霊夢の顔に向けたまま、魔理沙が手を霊夢の襟首にかける。
「消し飛ばしてやる。跡形も無くな」
「そうよ、あんた」

霊夢は笑っていた。笑顔のまま、擦り傷だらけの腕を古い友人の背中に回す。
「そうやって勝ち誇ってのこのこ間合いに入ってくるなんて――」
懐に残した最後の一本。霊夢はしがみつくように魔理沙の体に腕を回したまま、鈍く光る針の先端を少女のみぞおちに押し当てる。
「人間の戦い方を忘れたんじゃないの？」
「ははっ」
八卦炉を握りしめていた手が、だらりと落ちた。
「やってくれよ。――それなら、本望だ」
憑き物の落ちたような笑顔を浮かべて、魔理沙も笑っていた。
「――ふふっ」
「……ははっ」
ひとしきりくすくすと二人で笑い合った後、霊夢は魔理沙に向けていた針を離した。
「やれやれだわ。興が醒めたわね」
「いいのか？」
「いくら魔理沙でも、今生の別れがあんなシケた顔じゃね。寝覚めが悪いわ」
「よく言うぜ」

「泣きそうな顔してたわよ、あんた」
膝から力が抜けていく。壁を背にコンクリートの床にへたり込む霊夢から、魔理沙は静かに身を離す。
「……行くの？」
「言ったろ、顔を見に来ただけだってな。それに……」
箒に座ってふわりと浮かび上がる魔理沙の視線の先で、小さく緑色の光が明滅した。
「怖いお姉さんがもう一人来たみたいだからな」
「？」
「……霊夢！」
へし曲がった非常階段ドアの傍ら。作業服姿のままの早苗が大幣を構えていた。
「おっと」
魔理沙はこともなげに蛇の札を片手で払うと、軽やかに赤い月の方へと高度を上げる。
「これ以上はお邪魔だな。私は帰るぜ」
「……まりさ」
「ん？」
「ごめん」
魔理沙は何も答えずに、宵闇の中へと溶けるように消えていった。

「……歩けるから、下ろして……」
「駄目です」
それ以上の抵抗を見せることなく、霊夢は早苗に背負われていた。体は擦り傷だらけ、服もあちこち破れている。通報されたら面倒このうえない外見だったが、人払いの呪法がまだ効いているのか、誰ともすれ違うことはなかった。
「どうして言ってくれなかったんですか？」
「何の話よ」
聞き返すまでもなかった。早苗の背中で、霊夢はしばし口ごもる。
「……あいつには何も言わずに出てきちゃったから。ちゃんと話をする時間もなかったし」
「そう、ですね……」
二人だけで結界を超えた夜のことを思い出す。あれから何度、こうして二人で歩いてきただろうか。何度同じベッドで寝て、何度一緒にごはんを食べて。何度繰り返しても足りない、そんな些細な日々はふとしたきっかけで終わってしまう。そう、たとえば今日だって。なにかが一つ間違っていれば、霊夢は帰って来なかったかもしれない。
「あんたは……」
早苗の首筋に顔を埋めるようにしながら、霊夢が口ごもる。
「そうやって、ずっと自分で決めて、選んで……向こうに行くときも、こっちに来るときも、ちゃんと自分で決断した

じゃない。だから」
「だから？」
「東風谷早苗にできることが、博麗霊夢にできないわけがないのよ」
「ふふっ」
「……何かおかしいことを言った？」
「いえ……」
もう何年も一緒に過ごしていて、それでもまだ知らないことはたくさんある。
「私は何も選んでなんかいませんよ。欲しいものはすべて手の届くところにありますから」
あの秋の夕暮れに、遠く過ぎ去っていく背中を見たときから。ずっと憧れていたもの、近づきたかったもの。それだけは、今も手の届くところにあって。
「霊夢さん、意外と私のこと買ってくれてたんですね」
「そうでなきゃ一緒にいないわよ」
頼りにしてもらえているだろうか。もしそうであれば、そのささやかな奇跡だけでこの世界は生きるに値する。
「……だいたい、水臭いんですよ。いつもそうやって一人で……」
「水臭いのはどっちよ」
背中から、霊夢が早苗の耳に口を寄せる。

「さっき霊夢って呼んだでしょ」
「……」
早苗が顔を熱くする番だった。
「そ、それは、その……とっさに……」
「へぇ？」
直接見ることはできないが、背中で勝ち誇った顔をしているのは分かっていた。
「霊夢さんは霊夢さんです！」
「へーぇ」
によによと口元を歪めながら、霊夢は再び真っ赤になった早苗の耳に口元を寄せる。
「さ・な・え……さん？」
「……もっ、もう……！　元気なら降りてください！」
「だから最初からそう言ってるでしょ、早苗さん？」

「……大げさよ、あんた」
「だって」
シャワーを浴びて、まだ髪が濡れたままの霊夢をキッチンに座らせ、早苗は傷の手当てをしていた。

「折れてもないし吐き気も悪寒もない。擦り傷だけよ」
「ならいいですけど」
眉の上、小指の爪ほどの切り傷が走っている。血は止まっていた。保護パッドを貼りながら心配そうに傷を見つめる早苗に、霊夢は反対側の眉を持ち上げてみせる。
「ツバでもつけときゃそのうち治るわ。跡も残らないでしょ」
「唾……」
救急箱のふたを閉じながらなにやら考え込んでいた早苗は、やおらに霊夢の頬に手を添え、恭しく額に口づけた。
「他に痛いところ、ないですか？」
「今のあんたを見てると心が痛むわ」
早苗の髪が顔にかかるのがこそばゆく、霊夢は目を細める。
「またそんなこと言って」
互いの指と指を絡めて手を握りながら、顔を寄せる。唇と唇が互いを撫でる、優しいキス。
「――ありがと。いくらか楽になったわ」
顔が離れると、霊夢はふっと小さな笑みをこぼした。
「あとはごはん食べて一晩寝れば元通りよ。準備しとくからあんたもお風呂入ってきて」

早苗が風呂から上がると、台所から漂ってくる香ばしい香りが鼻をくすぐった。油の中でじっくりと火を入れられたにんにくの匂い。忘れていた空腹が急によみがえり、胃の奥がきゅっと疼いた。

「疲れてないですか？」

「何いってるのよ」

濡れた髪を拭きながらリビングに出ると、まだ湿り気を帯びた髪を後ろ頭で束ねた霊夢がキッチンのガス台の前で氷の入ったグラスを掲げてみせた。

「風呂上がりに台所に立って、料理をこしらえながら一杯ひっかける。これより気力が回復するものが他にある？」

「あはは……」

早苗には理解できない境地だったが、霊夢は楽しそうだった。鍋の中ではくつくつと、オリーブの入ったトマトソースが煮えている。傍らのフライパンの上では、サクごとパン粉をつけたビンナガマグロがきつね色のにんにくと一緒に揚げ焼きにされていた。

「スパゲッティ、ですか？　なんでしたっけこれ、なんかエッチな名前の」

「プッタネスカ、ね……変なこと覚えてるわねあんた」

涎を垂らさんばかりに目を輝かせてガス台の上をのぞき込む早苗を横目で眺めながら、霊夢は肩をすくめる。

「暇ならベランダでパセリとバジルとってきて。あとオレガノ」

「どのくらいですか？」

「いい感じのを適当に」
「それ何の情報もないですよね？」
プランターで育てている香草を何枚かちぎって渡すと、霊夢は手際よくスパゲッティのソースに散らし、刻んだトマトと和えてマグロのカツレツにかけるソースを作り、返す刀でゆで上がったスパゲティをソースに和えていく。
「……相変わらず見事な手際ですねえ」
「褒めても何も出ないわよ」
「……おつまみぐらい、出てきません？」
霊夢は肩をすくめてオーブントースターを開けると、期待するように横目でちらちらと様子をうかがう早苗の前に何か甘い匂いのするものを差し出した。
「ん！　美味しい。なんですか、これ？」
「蜂蜜とアーモンドトースト。……あとはいいから、テーブルの支度しといて」
「はぁい」
「あ、冷蔵庫からワイン出しといて。冷えてるから」
「えー……？　私酔わせてどうする気なんですかぁ？」
食事が終わり、テーブルの上が片付くと、早苗はコーヒーを淹れに立った。ミルでかりこりと豆を挽きながら、レモ

ネードに浮かべたグラスに四分の一の赤ワインと、膨らんだ胃袋のおかげで妙に鷹揚な気群だった。
「……それにしても、今日はごちそうでしたねえ。どういう風の吹き回しだったんですか？」
アルミの直火コーヒー沸かし（マキネッタ）に粉を詰め、火にかける。台所に立つ仕事の中で、これだけは早苗の専門だった。二人暮らしを始めた頃に買ったマキネッタは鈍くくすみ、長年のうちにコーヒーの香りが地層のようにしみ込んでいた。
「なんか話したいことがあったんでしょ、あんた」
「あ、そうですそうです」
こぽこぽと音を立てて、香ばしいコーヒーの匂いが立ち上る。二人用のマキネッタから濃いコーヒーを小さなカップに注ぎ分け、ミニカップのアイスと一緒にテーブルに置くと、早苗は裁判所から届いた封筒を霊夢の前に置いた。
「就籍決定？」
「そうですよ」
もともと外側で暮らしていた早苗とは違い、霊夢には外で通用する戸籍がなかった。自然、仕事をするにも部屋を借りるにも、何かと制限が付きまとう。銀行口座もなかったので、携帯電話すら早苗の名義で契約するしかなかった。
「何これ？　これ、私があんたの妹ってこと？」
「書類上ですけどね。親子のほうが良かったですか？」
「……ぞっとしないわね、どっちも」
それだけ言うと、興味なげに霊夢は書類の束をテーブルの上に置いた。

「ほら、でもこれでいろいろ手続き楽になりますし。免許とかも取れますよ？　車も……あ、霊夢さんお料理上手だから調理師免許もいいですねえ、ほら、お店開いたりとか」
「別に人に出せるようなもんじゃないし」
「そうですかぁ？　私、霊夢さんのごはん好きですよ」
「……十年もやってりゃ少しは板につくわよ。あんた、何でもいいとか言うくせに結構あれ食べたいとかこれ食べたいとかうるさいし」
「向こうにいた頃は貧相な食卓でしたからねえ、霊夢さん」
「あぁん？」
「舌が肥えてるんですよ」
「あんたの場合肥えてるのは舌だけじゃないでしょ」
「あァ？」
冗談にしては緊張感をはらんだ軽口を叩きながら、早苗は濃いコーヒーに砂糖をひとすくい入れてかき回す。
こうして昔の話をしながら笑い合えるようになるまで、どのくらいかかっただろう。ずっと昔、二人が自由に空を飛べた頃の話。遠い日々のように思える。要となった巫女を失った幻想郷は今頃どうなっているのか。ほかの誰かを巫女に据えたのか、あるいは緩やかに境界があいまいになって、滅びを迎えるのか。
「霊夢さんは、したいことないんですか」

はっきりしているのは、博麗霊夢は博麗霊夢しかいないということだ。
「そうねえ……」
顎を指で撫でていた霊夢が、何か悪いことを思いついたときの笑みを浮かべる。
「子供が欲しい」
「ぶっ」
危うく、コーヒーを吹き出すところだった。
「れ、霊夢……？　私たち、女同士……」
「種だったらどっかでもらって来ればいいじゃない」
「でも、そんな……」
子供。考えたこともなかった。いや、無意識のうちに選択肢から外れていた。このまま二人で年老いていくのが、望みうる最良の選択だと、そう信じていた、けれど。
「子供なんかいなくても、ずっと二人でいられるじゃないですか」
「難しく考えすぎよ」
カップで表情を隠すようにコーヒーをすする早苗に、霊夢は穏やかに笑う。
「私があんたの子供を抱きたいだけ」
「……一人ずつ、ですよ」

「ん？」
「……子供作るなら、一人ずつ、です。私だって霊夢さんの子供、抱っこしたいですから」
「いいわ」
「それに、子供出来たらちゃんと朝はみんなでご飯食べるんですよ。いつも朝起こしてくれないんですから」
「あんた起こしたら、私は誰と一緒に寝ればいいのよ」
「……一緒に寝たいって言えばいいのに」
「やだ」